

## サモアにおける〈ローカル〉の再構築 —サモア女性による「衣」の生産と消費を通して—

The reconstruction of “local” in Samoa: Samoan women’s producing  
and consuming of ‘clothes’

倉 光 ミナ子 Minako KURAMITSU

- 序論
- 第Ⅰ部 研究の視点と背景
- 第1章 研究の視点
- 第1節 本研究における〈ローカル〉概念
- 第2節 「衣」を通してみたジェンダー
- 第3節 研究の課題と研究方法
- 第2章 サモアと「ファアサモア」
- 第1節 サモアの概略
- 第2節 「ファアサモア」
- 第3節 サモアの「衣」
- 第3章 サモアにおける〈ローカル〉の歴史的プロセス
- 第1節 土着期のサモアと〈ローカル〉
- 第2節 接触期のサモアと〈ローカル〉
- 第3節 独立期のサモアと〈ローカル〉
- 第Ⅱ部：「衣」を通してみた現代サモアの〈ローカル〉
- 第Ⅱ-1部：国家開発政策と「衣」の生産—女性省による所得創出プログラムの展開を事例に—
- 第4章 女性政策と〈ローカル〉
- 第1節 グローバルな場における「開発と女性」
- 第2節 サモアにおける「開発と女性」をめぐる状況の変遷
- 第3節 女性政策を通してみたサモアの〈ローカル〉
- 第5章 女性グループの活動と〈ローカル〉
- 第1節 タガ村におけるCDSをめぐる状況
- 第2節 サマタウ村におけるCDSをめぐる状況
- 第3節 CDSの活動と〈ローカル〉
- 第6章 テーラーを目指す女性たちの〈ローカル〉
- 第1節 ソーイング技術トレーニング（SST）の実施状況
- 第2節 SSTの修了生によるスモールビジネスの状況
- 第3節 SSTの活動と〈ローカル〉
- 第Ⅱ-1部：考察とまとめ
- 第Ⅱ-2部：衣服をめぐる日常実践—現代サモアにおける衣服の入手，着用，そして仕立てを中心に—
- 第7章 「衣」の入手と〈ローカル〉
- 第1節 衣服の供給と〈ローカル〉
- 第2節 世帯における「衣」の入手と〈ローカル〉
- 第3節 ホワイトサンデーにおける「衣」の入手と〈ローカル〉
- 第8章 衣服の着用と〈ローカル〉
- 第1節 日常生活における服装
- 第2節 衣服の着用と「ファアサモア」
- 第3節 衣服の着用と〈ローカル〉
- 第9章 テーラリングからみた〈ローカル〉
- 第1節 サヴァイ島のテーラリング
- 第2節 アピアにおける個人テーラリング
- 第3節 テーラリング会社の場合
- 第4節 テーラリングを通してみた〈ローカル〉
- 第Ⅱ-2部：考察とまとめ
- 第Ⅲ部：結論
- 第10章 〈ローカル〉とジェンダー
- 第1節 考察されたサモアの〈ローカル〉
- 第2節 サモアをめぐる〈ローカル〉の特徴
- 第3節 サモアの〈ローカル〉とジェンダー
- 本論文の目的は、国際労働移動を通してグローバル化が進行している南太平洋の島嶼国・サモアを取り上げて、その現代の様相を「衣」をめぐる日常実践から考察することである。最近の人文地

理学では、グローバリゼーションという現象とそれがローカルな社会へ与える影響を考察していくことは主たる課題になりつつある。概して、「グローバル」と「ローカル」の関係は、前者が経済活動やメディアを通して後者を席卷していくのに対して、後者が抵抗を試みるという対立関係で描かれる傾向にある。これに対して、本論文では、次の3点から、グローバル化におけるローカル社会の新たな捉え方を試みる。第1点は「グローバル」対「ローカル」という関係性ではなく、「グローバル」を内包しつつ変容していく「ローカル」を描くことである。第2点は「グローバル」と「ローカル」の関係性において、多様な「ローカル」のあり方を呈示することである。そして、第3点は、ジェンダーによりグローバリゼーションというプロセスの影響が左右されることから、グローバル化の下にある「ローカル」とジェンダーの関わりについて考察することである。

第1章では、サモアにおいて「グローバル／ローカル」の関係性を考察するための視点と分析概念についての検討を行なった。人文地理学において、小規模スケール地域を取り扱った研究は、ある地域を自明のものとして捉え、その地域の自然・社会・文化の様相を描くものから、地域が人の活動を通して構築・再構築されていくものとして考察するものへと転換しつつある。この状況を受けて、本研究ではローカル社会そのものを「歴史的プロセス」の一部としてみることで、それが「他者・外部」とのつながりにおいて構築・再構築されていくものと捉えることにした。そして、サモアが南太平洋に位置する小規模な島嶼国家であるという前提から、研究では多様なスケール間の関係性を考察するための「空間スケール」と「他者・外部」とのつながりを考察するための「特異性 (the specificity)」という2つの次元から成る<ローカル>という概念を設定した。また、「衣」をめぐる日常実践を取り上げることに関しては、1) 発展途上地域の布地の生産は性別役割分業と女性性に深く結びついている；2) 衣服の視覚的な表象性によって最も雄弁に表される社会・文化的要素の1つがジェンダーやセクシュアリティである；そして、3) 女性の着用する民族衣装が国民性や民族性を表象する、といった既存研究の指摘から「グローバル／ローカル」とジェンダーの関わりを考察する上で適したテーマであ

ることを明らかにした。

第2章では、研究の背景として、本論文のフィールドである現代サモアの概略を整理した。とりわけ、サモア社会の特質として強く認識されている「ファアサモア (fa'aSamoa)」という概念は、サモアという<ローカル>の「特異性」を考察する上で必要不可欠となるため、その社会システム(マタイシステム)、経済的側面、そしてジェンダー関係の特徴について整理した。また、「衣」をめぐる日常実践に着目することから、サモアの「衣」について、伝統的なタバ(樹皮布)やマット、さらに、現代の衣服の様相に分けて概観した。

第3章では、現代の<ローカル>の前段階となる、サモアの<ローカル>の歴史の変遷について、マタイシステムの政治的側面に着目して考察を行なった。考察では、サモアの時軸を、1830年のキリスト教化以前(西欧諸国との接触以前)、キリスト教化とそれに続く植民地支配を受けた時期(西欧諸国との接触期)、そして、1962年の独立以降の3つに分けた。まず、西欧諸国との接触以前では、高位階層の婚姻のシステムを通して「地方」間の関係性が、タバなどの「衣」の生産技術や装飾品の入手を通してフィジーやトンガといった近隣諸島との関係性が構築されていた。次の西欧諸国との接触期では、キリスト教化の影響でコミュニティが再編されたり、西洋服が導入されたりした後、植民地統治を受けることでサモア諸島自体が分割され、「サモア」としての中央集権化が図られていった。そして、このプロセスにおいて、現在の首都にあたる「アピア」はヨーロッパ人コミュニティの場として新たに構築されていき、そこには次第に「ファアパラギ(白人のやり方)」に対置される「ファアサモア(サモア人のやり方)」という特異性が生じた。現代へ続く独立期では、国際労働移動者と彼らの経験を通して「ファアパラギ」に対する「ファアサモア」という関係性が再生産される一方、独立を果たしたサモアと依然としてアメリカ合衆国の支配下にあるアメリカ領サモア、アピアとそれ以外の地域、サモア本国と海外にあるサモア人コミュニティといういくつかの対置の中で、「サモア」における「ファアサモア」の正統性が問われるような状況が窺われた。

第4章～第9章では具体的なフィールドの事例をもとに、「衣」を通して見た現代サモアの<ロ

ーカル>について考察を行なった。1つめの事例(第4章～第6章)では、現代のサモアの生活にグローバルな影響を直接与えている開発プログラムを取り上げた。対象としたのは1991年に設立された女性省が実施している参加型プログラムであり、これはソーイングを中心に家政科関連技術の提供を行なうことで女性による所得創出を目指したものであった。この開発プログラムを、女性省の活動、女性グループの活動、そして女性個人の活動の3つに分けて考察した結果、「女性省」、「女性グループ」、そして「女性の世帯/個人」という<ローカル>が得られた。それぞれの<ローカル>は、開発の場におけるグローバルな政策の潮流やプログラムの立案、さらに海外で生活する家族成員からの仕送りを通して、「外部」との関係性を内包した空間スケールを有していた。その一方、考察された<ローカル>の特異性は何が「ファアサモア」における女性の望ましい役割なのかという点から描かれた。そこでは、ソーイングを学ぶことや収入を得ることが「ファアサモア」の行為として再解釈されていく一方で、サモア文化の維持、グループ内の階層性と行儀作法や儀礼交換の優先といった点で「ファアサモア」の日常実践が再生産されていた。

2つめの事例(第7章～第9章)では、現代のサモアにおけるより日常的な衣服をめぐる活動を取り上げた。具体的には、「衣」の入手、衣服の着用、そしてその仕立てという活動を通して描き出される<ローカル>を考察した。まず、「衣」の入手に着目すると、サモアの<ローカル>は、ナショナルレベルの「サモア」、「アピア」、そして世帯という3つで描かれた。布地と既製の輸入を通して得られた「サモア」では、とりわけ男性の既製の輸入を通して、地理的な近接性や歴史的なつながりのない地域との関係性が構築されていた。布地や既製の小売店の活動から分析された「アピア」では、西欧諸国との接触期に出現した混血層による経済活動が再生産されていく一方で、海外から戻ってきたサモア人が流入することで新たな「外部」との関係性が構築されつつあった。そして、世帯では、もっぱら親族関係や人間関係を媒介として海外から既製の輸入することで、「外部」との関係性に基づいた空間スケールが再構築されていく様相が窺われた。

次に、衣服の着用(服装)からみると、<ロー

カル>は海外との関係性を内包する、明確な領域で識別される「村」と明確な領域のない「アピア」に大別された。これらの<ローカル>の特異性は、常に海外からくる要素を取り入れて服装を再構築する一方で、サモアの正装をすることで「ファアサモア」の実践を再生産するプロセスとして捉えられた。また、女性に対する服装規則は、「村」と「アピア」を対置的な関係性で位置づけるだけでなく、そこに「ファアサモア」対「ファアパラギ」という関係性を再生産する役割も負っているように考えられた。

最後に、衣服の仕立て、すなわちテーラリングを通してみると、それは衣服の着用と同様に、「村」と「アピア」という<ローカル>を描き出した。ただし、「アピア」は服装を通して得られた<ローカル>に類似していたが、「村」は生存維持経済とマタイシステムを背景にした「ファアサモア」の社会関係を再生産している点で、服装を通して見た「村」とは異なる様相を示した。さらに、アピア都市部のテーラリングを事例にすると、国境を越えて「サモア」という場を再構築していく<ローカル>や、他者性をもつテラーたち自身という<ローカル>のあり方も描き出された。これらの結果、日常的な「衣」をめぐる活動からみたサモアの<ローカル>は海外との関係を内包する重層的な空間スケールで描かれる一方、海外からくる様々な要素が日常の中へ受容されていくと同時に、サモアの独自の服装が着用されることで「ファアサモア」としての行為や意識が日常的に再生産されている点で特異性を呈示していると考えた。

第10章では、以上の考察から結論をまとめた。第1に、「衣」をめぐる日常実践を通して描かれる現代サモアの<ローカル>は、概してどのような活動が行なわれるのか、そしてそれが誰によって行なわれるのかで、極めて多様なものとして描き出された。第2に、現代サモアをめぐる多様な<ローカル>の中には、海外との関係性を内包する形で再構築されていく空間スケールと、外部のものを取り入れて再構築されていく「ファアサモア」という特異性がほぼ共通して観察された。このように本論文の試みのうち、上記の2点はある程度達成されたが、第3点目にあたるジェンダーとの関わりは十分に展開できなかった。サモアの「衣」をめぐる研究には、例えば、サモア女性

の服装が「ファアサモア」におけるセクシャリティと密接に関わっている点、女性の正装がサモア文化を象徴するかのよう語られる点やテーラーの女性性の問題など、ジェンダーの視点を含めた考察が欠かせないことは明らかである。また、本研究で示唆された国境に左右されなくローカルという様相を描き出すためには海外のサモア人コミュニティにおける「衣」の状況に関する検討が必要である。今後はこれらの点を踏まえた上で、ジェンダーの視点を含めたローカルを描き出すことを課題としていきたい。

#### 初出誌一覧

倉光ミナ子 (2000) : 『開発過程における女性の「参加」とその背景—サモアにおける女性省のソーイングプログラムを事例として—』, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科提出修士論文。

倉光ミナ子 (2001) : 『所得創出プログラムの評価に関する一考察—サモアにおけるソーイング技術指導プログラムを事例に—』, 人間文化論叢, 第3巻, 271—281.

Kuramitsu, M. (2001): What is 'the local' in women's participation? : The contexts of two development programs in Samoa, *Geographical Review of Japan*, 74B, 15-32.

倉光ミナ子 (2002) : 『ファファフィネターラーを追っかけろ!—サモアのジェンダーと「衣」をめぐる調査から—』, 日本オセアニア学会 Newsletter, No.74, 1-9.

---

くらみつ みなこ

2000年4月お茶の水女子大学大学院・人間文化研究科比較社会文化学専攻入学。2003年4月よりお茶の水女子大学大学院人間文化研究科助手。